

一、エマオから戻る——新しいかたちの知識（方法を変える）

ルカによる福音書第二十四章一三—三五節

私たちの社会は知識を重要視する。未来学者は、私たちが「工業化社会」から「情報化社会」へ移行しつつあると告げている。私たちの時代のイメージはもはや鋳物工場でもアッセンブリ・ラインでもなく、マイコン・チップである。鋼鉄ではなく、シリコンの時代なのである。

しかし私たちの当面の課題は、「コンピューターがいとも簡単なものにしてくれた情報処理を今いかに行なうか」ではなく、「そもそも、いかに知識を獲得するか。いかに学ぶか。適切な行動がとれるようになる種類の知識はいかに得られるか。知る、ことと実践することは、いかに関係しているか」といったことである。

私たちの文化の中には、まずたくさんの情報や洞察や原理をできるだけ切り離した形で蓄積し、

それから身近な問題に應用すべきであるという長い伝統がある。私たちは冷静に振舞って、軽率な行動をとってはならないと教えられてきているのである。キリスト者も同じようなことを言ってきた。まず原理があつて、それから應用がある。まず知識があつて、それから行為がある。まず神学があつて、それから行動があるのだと。例えば「愛」

という原理があるが、これを中近東においてどのように應用するか。「正義」という原理は、ブルックスにおいてどのような意味があるか。「善をなし惡を避けよ」という原理については、これをお金を銀行口座に積み立てておくと必要に応じて引き出せるように、誰かに指導してもらつて知識の蓄積をしておくのである。このイメージを借用すると、神学とは、必要に応じて引き出せる「信仰の預金 (depositum fidei)」であると呼べるようにすら思える。しかしここに落とし穴がある。私たちは思考から行動への跳躍を延期しようと思えば、いつでも延期することができるのである。「問題を明確に把握する」ためには、もっと多くの情報を手に入れたり、もっと本を読んだり、もっと多くの会議に参加したり、もっと議論を重ねたりすることに必要で、行動するのはその後だ、という考え方である。こうして行動が危険を伴っているように見える時は、まだよく分からないからと言って、行動を延期するための都合よい言い訳が常に

1. エマオから戻る——新しいかたちの知識

出てくる。

私たちは自分を欺いている。私たちは実際には決して思考から行動への跳躍を「延期」したりはしない。なぜならば、逆説的に響くが、行動しないことは行動することだからである。それは怠慢によって体制を支持した行動をとることである。ユダヤ人をガス室に送り込んでいたナチスに反対しなかった人々は、ナチスを支持していたのである。「ほら、誰も反対していない」とヒットラーは言うことができた。中央アメリカの軍市政権へのアメリカの肩入れに反対しない人々は、軍市政権による虐殺を正当化している。「ほら、誰も反対していない」と私たちの政府は言うことができるのである。

第三世界のキリスト者は、思考と行動を違った方法で関連させようとしている。彼らにとって、ペルーのローマ・カトリック司祭であるグスタボ・グティエレスが言ったように、「神学は常に第二の行為」であって、第一の行為ではない。最初に来るのはコミットメントであり、それは自身の状況下において、貧しい人々や抑圧された人々に対する決意と関わりを意味している。神学的考察が始まるのは、貧しい人々の正義を求める闘いの真つ只中においてである。「考察と行動」の間には、互いに絶えず情報を与え合い、力を与え合う関係が進行している。私たちがもっとと行動するようになれば、私たちは行動の意味についてもっと実りある考察をすることがで

きるようになり、次の時にはもつと効果的な行動をとることができるようになる。私たちがもつと考察を深めれば、もつと実りある考察を行動の中に具体化し、さらにもつと効果的に考察することを学べるようになるのである。それは終ることのないプロセスである。

どっちが先なのか。それは鶏と卵のような問題である。私たちは決して真空状態の中で行動したり考察したりするのではない。思考は常に行動に先行し、行動は常に思考に先行する。それゆえに、問題は「どっちが先なのか」ではなく、「どっちが基本的なのか」ということになる。それゆして、第三世界のキリスト者はこの問いに対する明確な答を持っている。基本的なことは行動であり、連帯であり、関わりである。コミットメントから生まれてこない神学は疑わしいものである。

このことは、自分の感情や信条を厳しく抑制することによって、「偏向性のない」知的作業に高い価値を置くように教えられてきた私たちにとっては、「偏向性のない」知的作業にの「新しい」方法を支持するとなると、今までのすべてがふいになつてしまふ。確かにしかし結局のところ、この方法はそれほど新しいものではない。おそらく無視されてきてはいない、新しくはないのである。それは聖書的な認識方法に驚くほど似ている。私たちはそのことを、「認識論」を論じる箇所のようには見えないところ、すなわち復活顯現の記事において探る

ことにしよう。しかし結局のところ、復活顯現の記事はそれほど不適切ではないであろう。なぜならば、私たちの月並みな認識方法に挑戦してくるものがかつてあったとするならば、それはまさに、先例のない死人のよみがえりの報告にはかならないからである。

聖書のテキスト ルカによる福音書第二十四章一二—三五節

この日、ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、このいっさいの出来事について互に語り合っていた。語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。イエスは彼らに言われた、「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。そのひとりのクレオバという者が、答えて言った、「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。「それは、どんなことか」と言われると、彼らは言った、「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、祭司長たちや役人たちが、死刑

に処するために引き渡し、十字架につけたのです。わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。しかもその上に、この事が起ってから、きょうが三日目なのです。ところが、わたしたちの仲間である数人の女が、わたしたちを驚かせまじきました。そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです。それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行つて見ますと、果して女たちが言つたとおりで、イエスは見当りませんでした。そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいたため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。キリストは必ず、これらの苦難を受け、その栄光に入るはずではなかったのか。こう言つて、モーセやすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自身についてしてある事どもを、説きあかされた。それから、彼らは行こうとしていた村に近づいたが、イエスがなお先へ進み行かれる様子であつた。そこで、しいて引き止めて言つた、「わたしたちと一緒に泊まり下さい。もう夕暮になっており、日もはや傾いています」。イエスは、彼らと共に泊まるために、家にはいられた。一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかつた。すると、み姿が見えなく

1. エマオから戻る——新しいかたちの知識

なった。彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。そして、すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とその仲間が集まっていた。「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなされた」と言っていた。そこでふたりの者は、途中であったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったことなどを話した。

たくさんの方々の重苦しい出来事が続いていた。深くイエスに関わり、そしてイエス自身が連帯していた貧しい人々に関わっていた二人の弟子が、エマオに向かって歩いていった。彼らは慌しかった。つい先週のことを思い返していた。彼らは混乱し恐れていた。自分たちの指導者が殺されたが、彼らは周囲の騒乱の中で立派に役目を果たしたのではなかった。

ちょうど一週間前、一人の英雄の到着を歓迎して、紀元一世紀版のテープが飛び交うパレードが行なわれたところであった。しかし当初は期待されたものの、その後はすべてが下降線をたどった。当局との間に何度も激しい対決があったが、彼らは何としてでもイエスを捕まえようとやっきになっていたように見える。自分たち仲間の中に密告者がいるという寒々とした疑惑も生じ、遂にはそれが明白となった。ゲッセマネには機動隊が配備され、弟子たちは怖気づいてその

場から逃げ去ってしまった。イエスが逮捕された後、買収された証人たちによるまやかしの裁判が行なわれた。そしてこの件に関する裁判所の権限について大きな混乱が生じたが、まやかしの裁判に死刑が執行されたが、町外れのゴミの山で執行されたイエスの死刑は、電気椅子に相当する紀要であったという口実が設けられた。処刑場に設置された掲示板には反逆者と書かれていた。そしてこのままではまともな対抗ができないかのように、あの処刑された指導者が死からよみがえったという、戸惑わせるような噂が町中に広がった。何人かの女たちが朝墓に行った時、遺ぐ前の節で、はっとさせるような正直さをもって、男の弟子たちが女性の報告をまじめに受け取らなかったことを記している。「ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった」とルカは言う（ルカ二四・一一）。このことは、キリスト教会がその誕生後数時間しかたっていないなかった時に、すでに男性中心主義の罪に陥っていたことを証明するものに他ならない。

このような背景から生じた出来事の中から、私たちは——女性たちの方が正しかったことが立

1. エマオから戻る——新しいかたちの知識

証されていることに加えて——知識と行為に関する新しい方法論を提供してくれる四つの段階があることがわかる。

1 弟子たちの最初の問いは、当然なことであるが、「今何が起こっているのか」ということであった。彼らは「認識論を構築しよう」とか「一緒に理論化できるような全体的枠組を設定しよう」とは言っていない。そうではなくて、ルカが表現しているように、彼らは、「このいっさいの出来事について互に語り合っていた」（ルカ二四・一四）。彼らは自分たちのそれまでの行動、すなわち破滅に至った行動について考察していた。それだけではない。彼らは恐れをなしてここにちになり、扉を締めて閉じ籠っていた。反ローマ活動鎮圧委員会によって自分たちの指導者が殺されたのだとすれば、次は自分たちの番ではなからうか。イエスは二、三週間前、一人一人の十字架について語られたことがあったが（第八章）、反逆者組織に対するローマの第一方針は、できるだけ徹底的に壊滅させることによって、残党が再結集して組織作りを再開しないようにすることであった。

弟子たちは「今何が起こっているのか」という問いの答を探そうとしたが、よい答は出てこなかった。彼らは読み違えをしていた。彼らは「私たちは、イスラエルを救うのはこの人であろう

と、望みをかけていました」という考察の仕方をしていた。しかしイスラエルは救われなかった。実際、彼らの指導者はイスラエルの敵に対して立ち向かったが、五日間の闘いの後に殺されていた。以前イエスは、正しく天気の手測はできても、「時のしるしを見分ける」(マタイ一六・二三)ことを知らない者たちを叱りつけたことがあったが、それは弟子たちの現在の状況を物語っていた。何かが見落とされているのである。

2

見落とされていることの一部は、物語の第二段階で補われる。見知らぬ人が現れて、戸惑いを述べ合っている弟子たちと一緒に歩き始める。その人はラビか教師のようであった。戸惑採算を氣にする経営者を心底震え上からせるかも知れないが、現代の教育者を羨ましく感じさせ、教師は敵しかった。彼は弟子たちを、「愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ」(ルカ二四・二五)と叱りつける。それから彼はモーセや預言者から始めて、ユダヤ人の聖書に書かれていることを説明し、起こっている出来事の説き明かしをした。彼は実質的には次のようなことを語っている。「もし諸君が、今何が起きているのか知りた

ければ、過去に何が起ったのかを知らなければならない。現在を理解したければ、過去を理解しなければならぬ。もし諸君が今日ユダヤ人であることが何を意味しているのか知りたければ、ユダヤ人であることが、モーセの時代やイザヤの時代やエレミヤの時代に何を意味していたのかを考察しなければならないであらう」。

この助言で、議論のレベルは上がったに違いない。もしイエスが「イスラエルを救う」方であり、そのことで弟子たちが混乱しているのであれば、背景となるもっと多くの材料を得ることによってより深く問題を究明してゆくことができるはずである。「救う」とは、人々を一つにすることであり、新しい道に置くことであり、和解と癒しを与えることであり、愛と理解と公正の新しい時代を告げることを意味している。今や彼らは言葉のうえでは分かるようになり、何が問題となっているかについてのより明確な知的理解を持つようになってきた。

3 しかしこれではまだ十分でない。考察は行動にならなければならない。それは物語の第三段階で起こっている。二人の弟子たちが目的地であるエマオの村に近づいた時、見知らぬ旅人（その人の正体はまだ隠されていた）がなお先に進みゆく様子であったことは二人に明らかであった。そこで彼らはどうしたか。夕食に招いたのである。

これが転換点である。なぜならば彼らは救いについての話を続ける代わりに、それを、実践に移しているからである。彼らは全く見知らぬ人を食事に招くことによって、救いのわざに関わるの（ラテン語の *cum* と *panis*）は「パンをもって」を意味している。仲間（*companion*）のことである。語られる真理から生きる真理への転換、考察することから行動することへの転換がここにある。

そしてこの時初めて真相が分かり始める。二人の弟子は見知らぬ人の正体に気づき、イエスもそれに応えた行動をとられる。彼らが互いにパンを分かち合った時、すなわち言葉から行動へと移った時、すべてがはっきりしてくる。道々議論していた時には分からなかったが、「パンをさきになる様子でイエスだとわかった」（ルカ二四・三五）とルカは報告している。今や弟子たちもイエスの行為を通して単に知識だけでなく、新しい関係を持つようになった。彼らはさらに、単に現在についてだけでなく過去についての新しい認識を持つようになった。彼らはさらに、起こった出来事だけがわかるようになったのではない。道々起こっていた出来事についても、その時にはまだ鈍くて理解できていなかったけれども、そのことまでも分かるようになったのである。彼らは後になって、「お互いの心が内に燃えたではないか」と考察している。それは彼が

1. エマオから戻る——新しいかたちの知識

パンを裂かれた時だけでなく、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき」(ルカ二四・三三)に起こっていた。今や初めて、彼らはあの時何が本当に起こっていたのかが分かった。現在における真理の発見が、真理についての以前の議論に生命と力を与えるようになった。行動は考察を深めるのである。

4 しかしこれで最後なのではない。物語には第四の段階があり、イエスは消え去ることになる。

おそらく二〇世紀の人間なら誰でもこんな主張をする、生物学には抵抗があるであろう。人体はそんな簡単に「消え去る」ものではないと。しかし私たちはこんな表現をしている神学にあまり抵抗を感じるべきではない。それは、食卓の回りでひとたび洞察が得られたからには、行動はもはや食卓の回りにあるのではないということを私たちに告げる一つの方法なのである。行動するのはどこか他の場所である。

弟子たちは、グラスを傾けながら、「こんな素晴らしい宗教的体験は初めてだ」(もし彼らが神学者であつたなら、「少なくとも、実存的に有望な解釈を得られたという事実に乾杯しよう」と言つたかも知れない)と言つて、一晚中座り明かすような特権は与えられていない。イエスが

消え去る時、イエスにまつわる話は終るのである。真理は捕まえて仕舞っておくことはできない。どこかへ出て行かなければならない。イエスがそうであったように、彼らはいないのである。出て行って、何が起ったのかを人々に語らなければなら

それゆえに弟子たちはエルサレムからエマオへの七マイルの道のりをまだ終えないうちに、向きを変えてエマオからエルサレムへまた七マイルの道のりをまだ終えないうちに、向ルサレムへ——行動の場面から、考察を経て、新しい行動へと——通じていた。たった数時間前、彼らの行動は恐れと不安と危険で満ちていた。しかし今や彼らの行動は、危険は別にしても、恐れと不安に立ち向かえる新しい理解に裏打ちされていた。

物語の最後で彼らは出発点に立ち帰っている。しかし今やすべてが違っている。彼らは以前に自分の首が飛ぶのを恐れて、閉ざした扉の後ろ側にいた。今や彼らは日々自分たちの首を賭けて、ローマ帝国中に出て行くこうとしている。この行動は一度始まってしまうと終ることはないものである。

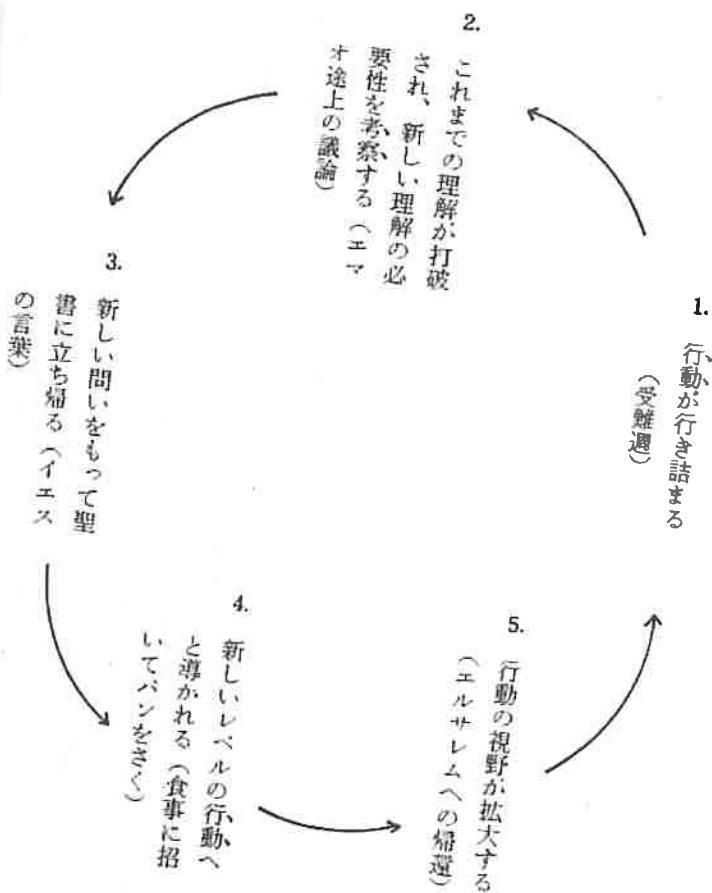
考察と議論のための課題

1 第三世界の多くのキリスト者は解釈学的円環 (hermeneutical circle) ということ語る。すなわち私たちが、自分たちの経験や世界や聖書や自身について自分を「切り離してしまふ」となく、また知ることと行動することを分裂させることなく、いかに解釈するかということである。次ページにはエマオの物語に基づいて分かりやすく説明した解釈学的円環の図がある。

この輪の循環は、弟子たちがエルサレムを去って、「もろもろの国民に」(ルカ二四・四七)向かって行く時、再び同じプロセスを経て新しい「行き詰まり」の経験に至る。

これは私たちの状況にどのようにあてはまるであろうか。どんな希望を与えてくれるだろうか。またどんな脅威となるであろうか。

2 哲学者ジョージ・サンタヤナはかつて、歴史を無視する者はそれを繰り返す運命にあると書いている。これは、イエスが戸惑いの中にあつた弟子たちに対して、現在を理解するためには過去を理解する必要があると語ったことと何と似ていることであろうか。そのことを次のことに



1. エマオから戻る——新しいかたちの知識

ついで試してみるとよい。(a)もし私たちが「ヴェトナムを忘れる」ならば、私たちは同じ間違いを他の場所でも犯すことになるであろう。(b)もし私たちが一九三〇年代や一九四〇年代におけるユダヤ人に対するホロコーストを忘れるならば、私たちは一九八〇年代あるいは一九九〇年代においてユダヤ人および全人類に対して、核のホロコーストを繰り返すことになるであろう。また別の言い方をすると、もし私たちが今日富める国が貧しい国を搾取している仕方を知りたいならば、私たちは植民地主義の歴史を知り、そして過去の搾取が今日いかに違ったスローガンと新しい装いのもとに繰り返されているのかを知らなければならない。

3 何が考察から行動への跳躍を妨げているのか探ってみよう。「救い」についての議論がその一例で、ゼミの主題にすらできることも知れないが、救いを実践することは全く別の問題である。「救い」の神学を持つのは立派なことである。しかし、それは、商売の取引で強引に割り込んでくる卑劣な男を赦したりすることとは違う話である。中央アメリカで貧しい人々が金持に搾取されていることは、私たちにも論じたり嘆いたりできる社会的事実である。私たち自身はその搾取に対して財政的援助と軍事的支援を与える共犯者となっており、そのことを認識することとは行動する課題を私たちに提起してくるが、私たちは事実を直視することを避けようとしてい

る。

4 私たちが図の中の第四段階を真刻に受けとめて、真理を分かち合い始めたらいったいどうなるだろうか。もし学生が試験中にそんなことを始めたら、カンニングになって新しい試験方法が必要になるであろう。もし誰かがビジネスの世界でそんなことを始めたら、きつと破産してしまひ、新しい経済構造を確立する必要があるであろう。もし私たちがそんなことを宗教に關して行なえば、友人たちは私たちの頭がおかしくなったと思うであろうし、おそらく何が本当に大切なについての新しい理解を確立することが必要になってくるであろう。